

## 席をゆずって

## くれた高校生

神戸高塚高校で起きた鉄門扉による女子高校生死事件は、人間性無視の「管理主義教育」の行き着く先を、そこにまざまざと描いて見せたといつてよいだろう。新聞報道によれば、開設して六年目を迎えたこの学校では、三〇項目を超える「生徒心得」（校則）が決められており、違反者には厳しいペナルティが科せられたという。本年度は「遅刻の絶滅」が生徒指導の重点として掲げられ、毎朝三人ずつの当番教師が「校門指導」をしていたとされているが、事件を起こしたA教諭は、その「顛末書」の中で「……時計を見ながら十秒前から十、九、八……とカウントダウンをはじめ「五秒前、閉めるぞ」といって、午前八時三十分、チャイムが鳴り始めると同時に門扉を閉めた」と述べている。「校門指導」とい

いながら、きわめて機械的にしかも力づくで規則を守らせようとする、非人間的指導の常態化が窺い知れるではないか。事件後の全校集会で「君達があと一〇分早く来れば」（このようなことは起こらなかつた）と校長は訓辞したというが、まさに倒錯した「管理主義教育」の本質を露呈した発言である。

さて、少し古い話で恐縮だが、一昨年の一〇月、京都で開かれたある教育研究会に参加した折に、帰りの列車内で出会った二人の高校生のことが思い出されてくる。連休でしかも行楽シーズンと金沢までしか帰りの座席指定がとれず、金沢で「北越」何号かの自由席車両に乗り継いだのだが、すでにデッキにまで乗客が溢れている混みようであった。それでも車両の中程まで入り込んだが、まあ、長岡までは立ちん坊も仕方があるまいと肚を据えていた。列車が金沢を出て程なく後から私の背中を突く者がいる。振り向くと、学生服をきちんと着た見知らぬ若者が二人並んで腰掛けていて、私に席を譲ってくれるというのであ

った……私を窓際の席に腰掛けさせ、自分たちは交替で立ってくれたのである。二人は大宮の高校生で金沢の大学の推薦入試を受けに来たのだと言った。私の隣に交互に座る二人と様々な話をしたが、私が、今の高校は校則などたいへんでしょうと言つと、二人は顔を見合わせながら「ぼくたちの学校はその点自由なんですよ」と言うのであった。聞けば、二人の通う高校は大宮市内のある新設校なのだが、「生徒心得」などというものはなく、学校全体に自由な雰囲気のみながっているというのである。「新設校でちょっと肩身の狭いようなところもあるが、気にはしないし、先生方もみんないいし……」と明るく素直に話す高校生たちであった。

その高校についてそれ以上のことを私は知らない。しかし、「生徒心得」などという変に大仰な権威に拘束されない生徒たちは、きつと素晴らしく人間的な資質を自らのなかに育て、蓄えていくのだろうか」と確信したのである。（か）